

僕らヒーローアカデミア

グレート・ジェイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒーロー達よ、教室に集結せよ。

目次

序章

ヒーロー達の体育祭	1
フェイズ1	
セロファン その一	7
セロファン その二	13

序章

ヒーロー達の体育祭

1

二〇一八年、世界は実に荒ぶっていた。

ある時から生まれ始めた『個性』（人権問題的観点からこのような名称がなされた）と呼ばれる超能力を持つ者達の存在によって、人々の平穩は脅かされている。というのがサイレントマジョリテイーの意見であった。つまるところ、政府が兵器になりうる超能力者達をどうにかしてほしい、そのような風潮があったのだ。されど相手は人間、害獣のように駆除するわけにもいかない。政府が対応に追われているうちにも、個性を使用しての犯罪行為はその数を増すばかりだった。

結果当然の流れとして、個性を持った自警団が生まれた。ヒーローの誕生である。

だが悲しいかな、個性を持つものは圧倒的マイノリテイー、ヒーローもまたマイノリテイー、故にヒーローは——多少の例外はあるものの——己の身分を隠して活動していた。

この物語の舞台である日本屈指の偏差値を誇る雄英高校の一年A組にもヒーローは存在する。

というよりも一年A組全員がヒーローだった。別にヒーロー養成校とかそういうわけではない——そんなものあるはずもない。

ほとんどが違った場所、違った時、違った理由でヒーローとして生まれ、全くの偶然ここに集まったのだ。

もはや、あほらしくさえある奇跡であった。

2

緑谷出久は焦っていた。かつてヒーローとしての力を受け継ぎ、今日まで活動してきた彼をもってしても困難な任務——体育祭だ。

出久の個性はかなり単純な身体能力強化であり、その強化の上限は果てしなく高い。日本全体を見ても最もパワフルな力。それが彼が

受け継いだ個性であった。もつとも、今の出久では力量が足りず、全力で使用すると自分自身を傷つけてしまうという致命的な欠陥があるのだが。その事実を考慮しても、出久の身体能力は通常のそれをはるかに凌駕している。そんな身体能力を持つ出久が体育祭など出ればどうなるか。当然、自分が個性持ちだということがばれる。

手加減はできる。そのための練習はしてきたから。問題は疲労だ。出久は思った。自分で言うのもなんだが、出久は非常に真面目な少年である。そんな真面目な少年が、明らかに手を抜いているとしか思えないくらいにしか疲れてなかったら、怪しまれるのは火を見るよりも明らかである。

「いいかい？ 私たちは正体を隠さねばならない。なぜなら、周りに危害が及ぶ可能性があるからだ。……それにできれば個性持ちだということも気が付かれない方がいい。悲しいことだが、人類が個性という力を受け入れるにはまだ少し時間がかかるんだよ」

自分に個性を与えてくれた先代の言葉が思い出される。まずい、このままでは絶対にまずい。

出久は助けを求めるように爆豪勝己の事を見た。彼もまたヒーローの一人、出久と同じく日本政府直属の秘密機関、個性犯罪対策機関に所属するヒーローである。

爆豪は熱心に柔軟体操をしていた。その顔からは勝利への渴望が見て取れる。

「か、かつちゃん？」

「なんだよ」

「まさか、体育祭、本気でやるつもり？」

「はっ！ 当たり前だろ」

「まじでか、かつちゃん」

その言葉を発さずとも答えはわかった。爆豪は明らかに勝つ気だった。彼は手のひらから爆発する液体を出すことが出来る個性を持っており、さらに身体能力も個性を持たぬ者と比較して高いレベルにある。これは個性を発現した者の体が、その個性に合わせて強化されるという性質によるものだった。とどのつまり、爆豪の身体能力を

披露する。個性持ちだとばれる。ということになりかねない。

出久は以前悪の組織の幹部と戦った時と同じくらいの速さで、心臓が走っていることに気が付いた。

3

うまく走れた。それはつまり速く、ではなく自然にということだ。飯田の個性はエンジンと呼ばれている。高速で走ることが出来、いつだって頼りになる個性だが、思い切り走る（もしくは走ろうとする）とふくらはぎ辺りにマフラーのようなものが出現してしまう。それを出現させないように走るには独特なコツがいり、そのための訓練は積んでいたが、飯田はこれが苦手だった。どうしても走ると気が昂っていつて、制御が難しくなるのだ。

「やっぱり飯田くん、足速いね」

「あ、ああ、小さいころから訓……走るのが好きだからな」

危うく口を滑らせ、訓練というところだった。友達の緑谷くんに嘘をつくのは心苦しいが、訓練なんてとてもヒーロー的すぎる響きだ。

飯田は個性がその名前を得る以前から脈々と続く、ヒーローの一家に生まれた少年だった。飯田家の人間は代々速さに関わる力を持ち、幼少期よりその力を磨かれる。そして、実力がある基準を超えたと判断されるとヒーローとしての名を名乗ることが許されるのだ。『インゲニウム』という栄光ある名を。

「それに俺よりも爆豪くんの方が速いだろうな。全く驚くべき脚力だったよ」

「そ、そ、そうだね！ や、やっぱりかっちゃんはすごいなあ！ あは、あはははははは……そ、それよりも常闇くんとかもすごくなかった！？」

「あ、ああそうだな。どうしたんだい？ なんだか顔が引きつってるよな」

「そ、そんなことないよー！」

「すごい汗だぞ？」

「走ったからね！」

そう言う緑谷くんは笑いながら（なんだか固い笑いだった）水を

飲んでくると言って、歩いて行ってしまった。

全くおかしな友達である。

4

体育祭というものは思ったより面白い行事だった。下界の祭りと侮っていたが、同級生とともに汗を流し、熱中して競技に臨むというのは実に楽しかった。何より元神でありヒーローとして活動している自分が勝てる。それが何より面白い。

月夜見、いまは常闇踏影と名乗っている少年（もつとも肉体の年齢が十五歳相当というだけで、月夜見の年齢は三千歳を超えている）は思わず口元を緩める。

「インチキだ」余計な声が水を差す。「インチキだぜ踏影」

「うるさいぞ、ダークシャドウ」

「さっきの玉入れは俺がいなかったら勝ててないぞ、これはインチキだ」

「お前は俺の一部だぞ？ それを使って何が悪い」

「インチキだ、インチキ」

「うるさい」

ぶつぶつと言っていたダークシャドウは同級生の一人である芦戸が近づいてくると黙った。どうやら個性持ちだとばれるのはまざいと判断するだけの頭は健在らしい。

複雑な（これは常闇の主張であって、客観的な見方をするなら、愚かなもしくは馬鹿らしい）理由で下界に人間として転生させられた月夜見は、神として持っていた権能のほとんどを失っているが、その一部をダークシャドウという月夜見とは別個の人格を持った生物として、その身に宿していた。頼もしい反面、非常に鬱陶しい同居人である。

故郷である高天原へ帰りたと思う気持ちはもちろんある。しかし、意外にも天上の存在は今の生活が気に入っていた。もちろん、善性を持った同級生の事もかなり。

「芦戸——」

その名を呼ぼうとした時、常闇は異変を感じ取った。

さすがに徒競走はごまかしきれないんじゃないだろうか、もう適当に理由をつけて逃げ出してしまおうか。そう考える程度には、芦戸は追い詰められている。彼女の個性は制御が難しい。暴走してしまう危険性は十二分にあった。

彼女が持っている最初の記憶は鉄格子と注射針だ。最初から二番目の記憶はつぶれた死体、その次が解けた死体だった。二番目と三番目をクラスメイトたちのものに更新するのは真っ平だ。

「原理はわからないですが、とにかく興奮しすぎないでください。そうしないと、またどこかの機関につかまってしまいますよ」

それが彼女の恩人——もしくは共犯者とも——の言葉だった。彼女は個性が暴走した芦戸と対面して、生き残った数少ない人物である。その彼女の言葉に従うのが最も賢明それはわかっている。わかっているのだが、つらいものはつらい。

せつかくの体育祭を楽しめないなんて、最悪だ。だが彼女が災厄になるよりは数十倍ましだろう。

芦戸は意を決した。残念だけど帰ろう。その時だった。クラスメイトの常闇が声をかけてきた。

「芦戸——」

しかし、常闇はその場で硬直する。日ごろから浮世離れた人であるが、それにしたって奇妙な行動であった。

「常闇?」

「チツ、興奮めだな」

「え?」

何か変なことをしてしまっただろうか? それとも個性の事がばれた? 一瞬、心臓が跳ね、すぐに杞憂だとわかった。

6

ポツポツいった感じだったのに、あつという間に大雨になった。雨天中止の旨が放送される。

よかった。一年A組の多くの生徒がそう思ったが、誰も口に出さなかった。

こうして今日もヒーローたちの秘密は守られたのである。

フエイズー

ゼロフアン その一

1

瀬呂範太の説明をしようとする、知り合いの多くがこういつたことを言う。

「普通にいいやつ」「地味に背が高い」「特徴薄い」「醤油顔」

そんな感じだ。その他大勢の一人、それが瀬呂だった。必死に勉強して、偏差値の高い雄英高校に入学したものの、入学直後のテストの成績は下から数えた方が早く、親を説得して勝ち取った一人暮らしも、面倒くささの方が勝っているように思える気がする。パツとした高校生活、何とかして変えなければいけないと意気込んでいた、方法がわからないままずるずる過ごしてしまった。

そんな瀬呂が変わったのはある朝の事だった。

2

その朝、目が覚めた時に妙に感覚が鋭くなっていたことを覚えていた。とにかくのどが渴いていて、目覚まし時計の音がやかましかった。目覚まし時計を乱暴に止めると、目覚まし時計の冷たさや、硬さ、果ては音が振るわせるわずかな振動すらも彼の手には感じられたが、それよりも水が欲しかった。

昨日洗っておいたコップを手に取り、水道から水をだす。一気にその水をのどの奥に流し込むと、ようやく目が覚めて、自分の現状を理解できるようになった。

肘が奇怪としか言えない形に変形している。

「う、うわあああ!!」

思わず手に持っていたコップを投げ出し、叫んでしまった。慣れ親しんだ肉体が一夜にして変貌してしまったのだ、叫ぶのもやむを得ないことだろう。その犠牲になったのはコップだった。ただし、床に落ちたのではない。

叫んだ拍子に、自分の腕から長い物質が射出されたのを確かに瀬呂

は目撃していた。その何かが、空中に舞ったコップを絡めとり、壁に激突してコップを粉碎したのもしつかりと目に焼き付けた。一方の瀬呂はというと、コップの代わりに思い切り尻を床にぶつけた。

尻もちをついたまま、しばらく呆然と砕けたコップの張り付いた壁を見ていた瀬呂だったが、ようやく正気を取り戻した。

「な、なんだよこれ……」

瀬呂が肘に目をやると静かに変形した肘が、いつもの姿を取り戻すように腕に埋まっていった。腕を振っても、もう一度肘が変形したりはしなかった。

怖くなって家を飛び出した。なぜか壁を傷つけたら大家さんに怒られちゃうな、なんてことばかりが頭に浮かんだ。

外に出ても日常はこれっぽちも変化していなかった。変化したのは瀬呂である。

「なんなんだ、なんだんだよ……」

ぶつぶつとしゃべる瀬呂を同級生が見たら、きつと不審に思っただろう。だが、幸か不幸か通っている高校から瀬呂の下宿先までは結構遠く、近くに下宿している知り合いはいない。親の説得に時間がかかり、目ぼしい物件を借り損ねたことが役に立つ日が来るとは思っていなかった。

瀬呂がある程度の冷静さを取り戻すまでに、三十分ほどかかった。

「個性の問題は未だ根深いものなんですな」家電量販店のテレビの中で、アナウンサーが深刻そうに言った。

「うるせえ」口の中で瀬呂は悪態をついた。

さすがに瀬呂にも理解できていた。個性だ、瀬呂は個性が発現したのだ。

普通だった俺が、めでたく異常な奴に早変わりってか。……泣けるぜ。

急に瀬呂は周りの人間が怖くなった。自分が個性発現者だとばれたら、あそこにいるおっさんは俺を警察に引き渡すのだろうか。それとも、仲間を募ってランチしてくるとか？ もしくはさっさと家に帰って、食事の時に家族に「今日はとても気持ちの悪いやつを見たよ。

肘が信じられないような形をしているんだ」と話題にするとか？　そして、奥さんはこう返す。「やめてよ、食事中に」

瀬呂は小走りでその場を後にした——本当は全力で逃げ出したかったが、全力で走ったりなんかしたら個性があるということがばれてしまうと思った。

路地裏にたどり着いた時にはもう瀬呂は泣き出したい気分だった。昨日までの何者かに変わりたい自分はすっかり消え失せていた。どうして俺がこんな目に、そんな思いでいっぱいだった。

「ふざけんなや!!」

めそめそ縮まった体が、ビクンと大きく跳ねた。突然の怒号の主はどうやらすぐ近くにいるようだった。運の無いことに、おたおたとする瀬呂が逃げるよりも早く、くだんの人物は姿を現す。

チンピラというのを頭に浮かべた時、きつとこの男のようになるだろう、そんな印象を受ける人物だった。男は瀬呂を認めると、男のよくな性質を持つ者特有の、なめられないように極限まで歪められた威嚇するような目で瀬呂を睨んだ。

「何見てんのや!!　見世物ちやうぞ!!」

今日という散々な日を思えば、瀬呂が何も言えず、何も出来ないのは仕方ないことだったと思えるかもしれない。だが、男はそんなこと知らなかったし、肝っ玉が小さかった。急に焦ったような顔をする、再び瀬呂に吠えた。

「まさか！　お前見たんか!!」

「な——」

何をですか？　震える声でそういうよりも先に男の拳が瀬呂の左の頬を殴りつけた。今日二度目の尻もちをつくと、焦燥感あふれる男の顔がずいぶん高いところにあるように見えた。

「み、見られたからにはい、生かしておくわけにはいかへん!!」

男の手からにゅっと刃物が現れた。妙に鋭くなった感覚からは、あの刃物はナイフでもカッターでも、ましてや手裏剣とかそんなものではない、男から生えているんだと伝わってくる。

個性を生で見たのは、初めてだなと思った後、いや今朝見たか、と

訂正した。周りの音がひどく大きく聞こえる。

自分は死ぬんだと思い、ちよつとだけ安心した。これで両親には息子が化け物になったと知られないで済む。頼むから死ぬならスパッとやってくれ。そんなことを考え始めた時だった。

「お辞めなさい」全く知らない男の声だった。「その少年は別に見ちゃいませんよ。そう滅多に誰かを殺すもんじゃない」

「だが!!」

「それとも我々のお話はここまでということですか？」

「それは……チツ！ 何してんねん！ はよどつかいけや!!」

男の言葉に一目散に走り出せたのはほとんど奇跡のようなものだった。走って、走って、走って。ついにたどり着いた自分の家。瀬呂はもはやほとんど意識を手放しながら、布団に入って、ただじっとしていた。二時間後には本当に意識を手放した。

3

目が覚めた。夢ではないと親切にも教えてくれたのは、壁に張り付いたままのカップだった。

不幸続きで消沈した心でも、着替えて学校に行くという習慣はこなすことが出来た。カップに背中を見送られ、瀬呂は家を出た。

昨日の事ですっかり瀬呂は抜け殻になっていた。個性の発現とそれに伴う恐怖、そして個性を持ったチンピラとそれに殺される恐怖、十五歳の少年が一日の中で味わうにはつらすぎる経験だった。

少年が目の前を横切った。瀬呂は考える。もしかしたら俺は何かの呪いに罹ってしまったって、これから不幸なことがとめどなく起こるんじゃないだろうか。

少年はボールを追いかけている。瀬呂は想像する。もういつそのこと行方を眩ませて、チベット辺りで修行僧になるというのはどうだろうか。そして、同じように悩んでやってきた人達にこう言うのだ。「案ずるな、君たちの悩みなどこの地球に比べればちっぽけな物さ」

ボールははるか遠くまで転がって行ってしまった。瀬呂は思い出す、両親の事を。両親はどう思うだろうか。俺がこんな風になってしまっても、変わらぬ愛をくれるだろうか。それともくれるのは鉄砲玉

か？ お供はもちろん「私たちの息子をどこにやった！ この化け物め！」だろう。

少年はボールを追いかけていく、はるか遠くまで行けるのだろうか？ 瀬呂は自分を励ました。おいおい、範太、そう気を落とすなよ。自分の腕を見てみるよ、そこじゃない肘だ。何もおかしいところなんてありやしないだろう？ それに制服は長そでだ。きつとバレずに生活できる。ちよつとびくびくしなきゃいけないが、今までと変わらない生活が出来るんだ。喜べよ。

少年は暴走気味のトラックと出会った。そして、瀬呂はすでに走り出していた。

なにをやっているんだ俺は！ 心の中で絶叫する。いかにもヒーロー気取りな行動だと思った。おいやめろ、だめだ。だめって一体何が？

「あ、ありがとうお兄ちゃ——」

気が付いた時には少年は瀬呂の腕の中だった。トラックは気にもしてないように通り過ぎていく。少年はとつてもすごい（自分が知るどんなほかの大人だって、この人より速くは走れないだろう）お兄ちゃんにお礼を言おうと思って、固まった。幼い少年にすら瀬呂の憤怒が一目でわかった。

実際、瀬呂の心は燃え盛るマグマのようだった。昨日と今日のすべてがぐちゃぐちゃにかき回され、シチューになっていた。個性に怒った、社会に怒った、チンピラに怒り、トラックに怒ったが、とにかく腹立たしいのは自分だった。

どうして俺がこんな目に！ どうして！ 知るかそんなこと！ 俺は真面目に生きてきた！ 必死に生きてきた！ それをなんだ！ どういつもこいつも！！

昨日から自分のすべてを否定していたように思える。すべてが俺を否定していたように思える。しかし、それは重大な間違いだった。

少年は瀬呂の腕から離れ、家へと帰っていった。瀬呂もまた家へと帰っていった。

「ただいま」出迎えたカップに言い放つ。「さつきぶりだなクソツた

れ」

瀬呂はカップと向き合った。ひどく上着が窮屈に思えて、上着を脱いだ。思った通り肘が変形していた。クソツたれ、お前のことだって待ってたんだぜ。

俺は変わった。きつと少年が大人になるような具合だ。個性を持つ者としての思春期はさつきまで、あの少年を助けるその瞬間までだった。個性を持ったから、誰かに白い眼を向けられると、親しい人たちが離れていくと、そう思った。しかし、それは勘違いだ。思春期特有の物だ。

昨日のチンピラが頭に浮かんだ。俺はお前のようにならない。俺の体は小さな命を助けるために勝手に動いた。俺自身は諦めていても、心の底はそうじゃなかった。それを誇りにしてやる。誇りを支柱にして、立ち上がってやる。お前のように個性で人を傷つけたりしない。俺は――

「――ヒーローになる」

一日中壁に張り付いていたコップは、瀬呂の手によって、意外なほどあっさり壁と別れた。

セロファン その二

4

瀬呂は学校を休んだ。まず初めに自分が出来ることを知りたかったのだ。少し試してみてもわかった。こりやあ確かに個性を持つ人間は危険視されるはずだ。握ったリンゴは一秒の間もなく粉碎され、軽いジャンプで天井に頭をぶつけた。試す順序が逆だったら、危うくここを追い出されるほどの大穴を作ってしまっただろう。それはまずいので場所を移す必要があった。心当たりはある、少し遠いが。財布と携帯、タオルなんかをバッグに詰めて、家を後にした。途中で菓子パンを買ったりして、なんだか遠足みたいだと思った。実際、そんな気分だった。

乗車カードにいくらか金をチャージして、電車に飛び乗った。自分と同じくらいの年齢の人間は二時間前にこうしてなければ、遅刻と判定されるだろう。まばらにいる人の視界を出来るだけ避けるように端の席に座ると、携帯を取り出して個性について調べ始めた。

曰く、超能力。曰く、危険な物。曰く、人類の進化の形。過激なサイトには個性持ちは全員犯罪者予備軍だから政府が管理しろなんてものもあった。瀬呂はそれを鼻で笑って(自分でも強がりだっと思ってしまった)携帯をしまった。目的地は遠い。少し眠ることにした。三時間ほど経って、瀬呂は山の中にいた。交通費は痛い出費だったが、ここならば誰にもバレずに自分の個性を思う存分試すことが出来る。

瀬呂は思いっきりジャンプしてみた。景色が勢い良く変わって、開けた。

「えっ。」

高くそびえたつ木々より高くジャンプしてしまったのだ。これはさすがに予想外だ。もう一つ予想外なのは、着地の事だ。

「うおおおおおああ!!? うぎゅー!」

思いっきり顔を打ち付けた。鼻血が垂れてくる。そんなことまではっきりわからなくてもいいのに。

「オーケー」倒れ伏したまま強がりと言う。「五分後に再開と行く」
宣言通り五分後には立ち上がっていた。自分の個性はあのくつつく物質を出すことだ。一日中壁に貼りついていられる粘着性の物質、それを使いこなすことは大きな課題だ。

「ほあー！」

とりあえず、そんな声を上げて腕を突き出してみる。……何も起こらない。

「とおー」「あちようー！」「えいやー！」「あいやー！」「発射！」「出る！
出やがれ！」

いくら叫んでもうんともすんとも反応しない。あの物質が飛び出るどころか、肘が変形することもない。いきなり手詰まりであった。「勘弁してくれよ」昨日のコップを思い出した。壁にくつついたコップを。物質が射出される。「幸先悪いぜ……：……はあ!？」

地面に向かって真っすぐに長方形の物質が肘から伸びている。大慌てで腕を引くといとも簡単に千切れた。また尻もちをつく。しかし今回は笑みがこぼれた。

「ふふふ、ふー！」

瀬呂は腕を突き出した。脳内でコップが舞うのと同じように、肘から舞うようにして物質が射出される。次に起こったことは全く意図しないものだったが、後にもしかしたらあれは自分の本能つてやつが個性の使い方を教えてくれたんじゃないか、と瀬呂は思った。

肘の奥で何かが回転して、巻き尺のように物質を肘の中に引き戻した。ピンつと来た。瀬呂は物質を一本の木に張り付けた。そして、巻き尺を引き戻す。予想した通りに瀬呂の体はターザンの要領で、木にぶら下がった。

「ふふふ、ふふはははー！」

おかしくてしようがなかった。物質を素早く木から引きはがすと、当然体は浮遊感に包まれた。しかし、そのまま地面に真っ逆さまとはいかない。素早く別の木に向かって物質を——いや、もうこの名前は適切ではない。テープ、そう呼ぼう——テープを射出した。テープが巻きとられる。瀬呂の体は空中を移動する。この移動方法は便利で、

速い、何より気分がいい。テープが幾度も射出され、幾度も巻き取られ、瀬呂の体はグングン進む。木々の間を飛んでいく鳥のように瀬呂は自由を感じた。そして、木に激突して地面との再会をはたしたのだった。

「オーケー、要練習ってわけね。五分後に再開と行こう」

5

「なあ、瀬呂、なんか筋トレでも始めたのか？」

「何で？」

「いや、なんとなく」上鳴がそう言って、瀬呂の腕を触った。「地味に筋肉ついてない？」

「地味について……放せ、放せ。俺はホモじゃないぞ」

「な！俺だってホモじゃねえよ！」

上鳴は瀬呂の腕を放して、顔をふざける様に顔をしかめた。金髪の頭と軽そうな口調を持つ上鳴は、外見通りの面を持っている一方で、優しさや正義感といったものも確かに持ち合わせている。そんな彼は瀬呂が腕を触られて、個性を持っているということがバレることを不安に思ったことを、感じ取ったのでさっさと腕を放したのかもしれない。

「で、結局筋トレ始めたの？」

「あー……まあそんなところかな？」

「お前ちよつと前も風邪で休んでたし、健康づくりにはいいんじゃないかな？」

いい友人である上鳴に嘘をつくのは心苦しいことだったが、さすがに本当のことは言えない。第一、目が覚めたら筋肉がついていましたなんて、誰が信じてくれるんだ。

「筋トレはいいぞ」突然現れた佐藤が言った。

「うわ、なんだよ、佐藤。びつくりすんじゃんか」

「体はすべての基本だからな。筋トレはとて面白いことだ」

「無視か。無視なのか、いいだろう食らえ！」

上鳴は渾身のデコピンを佐藤へと繰り出すが、佐藤は悠々とそれを躲した。

「ははは、お前のように貧弱な男の攻撃など食らうかあ！」

「なんだとお!? 筋肉馬鹿め! 成敗してくれる!」

両手をデコピンの形にして追いかける上鳴と、自慢の筋肉を利用して奇妙なポーズをとりながら逃げる佐藤の追いかけてを眺めるのは、もちろん楽しいことだった。たまにヤジを飛ばせば彼らは反応する。二人は友達である。上鳴誘われて雄英高校のゲーム部に入部したのは正解だった。

だが、友達にも言えないことというのは存在する。彼らと遊ぶのは楽しいが違った興奮を持ったこともある。

「あ、わりい。今日もう帰るわ」

「えー、ギャラガしてけよー」

「ちよつとやることがあつてな」

「そつか、じゃあなー」

「筋肉と和解しろよ」

「なんじゃそりゃ」

二人に別れを告げて、瀬呂は家に帰った。あの日からひと月の歳月が流れようとしていた。瀬呂はベッドの上に投げ出してある、衣装――瀬呂お手製のヒーロースーツ――を手を取った。

なかなかいい出来だ。もちろん瀬呂の主観的感想である。大した技能もないのに完成したことは称賛に値するものの、ヒーロースーツというよりはパジャマパーティーといった方がしっくりくる出来だった。だが瀬呂は気に入っていた。スーツに手を通し、仕上げにフルフェイスマスクを装着する。

「完璧だ」

これで正体はばれない。問題はヒーローとは何をするべきなのだろうということだった。とりあえず、スーツを脱いでバックパックに詰める。人を助ければいいんだ。とにもかくにもそうしよう。

外を歩くといつも通りに平和だった。全くこういう時に限って、間の悪いことだ。瀬呂は頭を振ってそんな考えを振り払う。ヒーローたるものが、平和を尊ばなくてどうするんだ。

適当にぶらぶら歩いて、ゆつくりと自分の感覚に没入していくと、

改めて自分の体に起きた変化を感じる事が出来る。人々が行きかう息遣いが聞こえる。足音も。目には夕焼けの赤が何種類にも重なって見えた。誰かが言う。「今日のご飯は何？」誰かが答える。「スパゲティ」

悪くない気分だった。ミートソースの香りが鼻をくすぐった気がした。風はわずかに体を撫でた。

そんなことをしているうちに、いつの間にか辺りはすっかり暗くなってしまうていた。瀬呂は高校生だ。あまり出歩いていると補導されてしまう。今日はあきらめて帰ろう。出鼻を挫かれてしまったが、こんな日もある。家に引き返そうとした瞬間、確かに聞こえた。「勘弁してくれ！」

ついに来たか。瀬呂は走り出した。そして、スーツを着ていないことに気が付いた。前に裏路地であったことを思い出して、非常にためらわれたが、意を決して裏路地に飛び込む。そして再び走り出した。その時のもう瀬呂はヒーローになっていた。

瀬呂の下宿している町は都会と呼べるだけの場所だった。長い時間、人が行きかっている。それだというのに、裏道はこんなにも閑散としているのかと瀬呂は驚いた。いつもならばしんと静まっているのだろうか、それともこれがいつもの風景なのか？ 一人の男が一人の男をナイフで脅している。行動は迅速に開始された。

素早くテープが飛び（訓練の成果でテープは真っ直ぐ飛んだ）、脅している男のナイフに当たり、勢いそのまま男の手ごとナイフを壁に貼り付けた。

「な、なんだこりゃ!？」

「うわ!？」

「さっさと逃げなおっさん」

「え?」

「なんだてめえは!？」

「ほら早く早く」

「あ、ありがとう」

そう言つて脅されていた男は逃げていった。お礼を言われたもの

の瀬呂の気分的には謝りたいくらいだった。スーツを着るのに手間取ったせいで、助けるのが遅くなってしまった。けががなくて一安心だ。次からはスーツは中に来ていよう、瀬呂は心に誓った。

「おい！ てめえこの野郎ふざけた格好しやがって！」

「なんだと？ かつこいいだろう！」

「ふざけんなこの野郎！ 何なんだよてめえは!?! ヒーロー気取りか!?!」

「気取りじゃない！ 俺はヒーロー、ゼロハンマンだ！」

ビシツとポーズを決めるも反応が悪い。表情も訝しげだ。

「……………」

「…なんだよ」

「…だせえ」

「はあ!?!」

「なんだよゼロハンマンで、これゼロハンテープなのか?」

「わかんねえけど、それっぽいだろう?」

「それにしたってだせえよ。ていうか個性持ちってそんな感じになるんだ、きめえ」

「うるせえ! ……じゃあそうだな、俺はヒーロー、テープガイだ!」

「だせえ」

「ゼロボーイ!」

「だせえ」

「ペツタンマン!」

「すこぶるだせえ。安易にマンとかつけるからだせえんじゃねえの?」

「じゃあ…ゼロファンでどうだ!」

「それは、結構いいな」

「まじ? ありがとよ」

そう言つて瀬呂は両手からテープを飛ばして、男を簀巻きにした。鮮やかな手並みだと自分をほめたいくらいだ。

「そのうち警察が来るから、もう悪さすんなよ」

「くっそ！ 覚えてやがれ！」

瀬呂はテープを飛ばしてその場から立ち去った。やったことはちよつと勇敢な高校生くらいの事で、正直個性を使つてするような人助けなのかは疑問に思える。だが、人助けは人助けだ。警察に匿名で電話をかけた後、瀬呂はちよつとだけ胸を張れるような気がした。

こうして、ヒーローゼロハンマン改めゼロファンの初めての活動が終了したのである。